特集

日本一小さな先生

赤ちゃん先生プロジェクト

～ふれあい、命、愛情について考えさせる～

「赤ちゃん先生」が足利市で初めて開催されました

今回は、足利市立御厨小学校を会場として、栃木県下の教育機関では初めて開催された「赤ちゃん先生プロジェクト」を取材しました。このプロジェクトは、赤ちゃんとママが一緒に教育機関や高齢者施設、企業等を訪問して、赤ちゃんとふれあった受講者さんたちが、さまざまなことを学び、癒しや感動を共有し、人として一番大切なことを感じてもらうという〝人間教育プログラム〟です。今回の開催は、ママの働き方応援隊の群馬前橋校が主催しました。

これまではダミー人形を使用した授業を行ってきましたが、今回は、初めて本物の赤ちゃんを迎えての授業とあって、当日は、児童それぞれが手や足の大きさを比べたり、抱っこしたりして、自分との違いを感じていました。

本事業の生まれた背景…

育児中は、ビジネスシーンにおいてはデメリットだと言われる時期であり、育児中の母親は社会と切り離され孤独を感じることがあります。ならば、育児中がメリットになる働き方をつくろうと始まったプロジェクトです。

小・中学校向けのプログラム内容は…

「命の大切さ」「感謝の気持ち」を感じてもらいながら、受講者自身も赤ちゃんと同じように自分が大切な存在であることに気づくこと、自己肯定感を高めていじめや自殺を予防することなどを目的としているのが小・中学校向けのプログラムです。実際に赤ちゃんとふれあい、赤ちゃんが母親から生まれたときの話などを聞くことで、育ててくれた方の思いや自分の価値・周りの仲間の命の価値に気づく児童や生徒が多いそうです。

当日の児童たちの様子は…

当日は、8人の赤ちゃんが先生となり、それぞれのお母さんが名前などを紹介してスタート。御厨小学校の3年生の児童が7～8人でグループをつくり、まずはパンダうさぎコアラの替え歌で〝おいでおいで赤ちゃん〟と歌って、グループに1組の赤ちゃんとお母さんを招きいれると、すぐに児童各自が自分の手や足と大きさを比べたり、抱っこしたりして、その大きさの違いなどに驚いていました。

また、お米（3㎏）を入れた袋を持った児童に、赤ちゃんのお母さんが「生まれる前は、このくらいの重さの赤ちゃんがお母さんのお腹の中にいたんだよ」と話し、児童たちは、「うわぁ、重くて持ってられないよ」と、感嘆の声を上げていました。

このほかにも、円グラフで小学生の規則正しい生活が説明された後、赤ちゃんはその日の体調によって生